

# 日蓮聖人の女人成仏観

桑 名 貫 正

## 一 はじめに

日蓮聖人の宗教的発心の動機は「少<sup>わかま</sup>より今生のいのりなし。只仏にならんとをもふ計<sup>けい</sup>也。」(定一三八頁)とか「民の家より出でて頭をそり袈裟をきたり。此度いかにもして仏種をもう(植)へ、生死を離るる身とならん」(定一五三頁)というように、信仰の目的は、成仏の願望にあつたのである。また「皆人の願せ給事なれば、阿弥陀仏をたのみ奉り、幼少より名号を唱候し程に、いささかの事ありて、此事を疑し故に一の願をおこす」(定一五五三頁)と見えることから念仏信仰を出発に八宗兼学の後、法華信仰に帰結するのである。後の行動は「經文を亀鏡と定め、天台法華の指南を手ににぎりて、建長五年より今年文永七年に至るまで、十七年が間」(定四六五頁)というが如く、天台法華教学の立場で弘通されておられるのである。

また日蓮聖人が比叡山に遊学する直前の21歳の時に「戒体即身成仏義」を著し、伝教大師の極意である受戒の当処に成仏できる受戒即成仏を中心に論じている。この論文は日蓮聖人の16・17歳から21歳までの法華教学理解の大系である。真言の戒体を最上とするも、その説明は一行もなく法華教学を中心に論ずる故にこの頃から日蓮聖人と法華經との肌が一致されていたかと思う。

日蓮聖人の女人成仏観(桑名)

日蓮聖人の女人成仏観を考察する時に、先述する「天台伝教の指南を手ににぎりて」という内容が随所に窺える。例えば38歳「守護国家論」（真蹟曾存）「総天台妙楽」三大部本末意法華経漏諸経攝愚者・悪人・女人・常没闍提等。他師不覺仏意故法華経同諸経」（定一一一—一二頁）。44歳「女人成仏鈔」天台大師云、他経但記菩薩不記一乘但記男不記女とて、全く余経には女人の授記これなしと釈せり」（定三三四頁）。58歳作「上野殿御返事」の「夫第五卷は一経第一の肝心なり。龍女が即身成仏あきらかなり。提婆はこころの成仏をあらはし、龍女は身の成仏をあらはす。一代に分絶える法門也。さてこそ伝教大師は法華経の一切経に超過して勝れたる事を十あつめ給たる中に、即身成仏化導勝とは此事也。此法門は天台宗の最要にして即身成仏義と申て文句の義科也」（定一六三頁）等である。

日蓮聖人は法華経の特色であるところの女人成仏を説き女性を救済された。故に日蓮聖人の周囲には実に多くの女性達がいた。その名前を確認するだけでも六六人になる。その他、某女・某尼等の名前不明者達も存在している。教化の実例を見ると、日眼女には「但法華経ばかりに、女人仏になると説」き（定一六二四頁）光日尼には「三のつなは今生に切ぬ。五のさわりはすで（既）にはれぬらむ。心の月くもりなく、身のあかきへはてぬ。即身の仏なり」（定一七九五頁）と指導されている。一方、千日尼からは日蓮聖人の教えに女人成仏を期待す事例が見られる「送給御文に云、女人の罪障はいかが存候へども、御法門に法華経は女人の成仏をさきとするぞと候しを、万事はたのみまいらせ候て等云云」（定一五三八頁）と。この返書の内容に天台・伝教大師の成仏観が述べられているのである。

そこでこの小論のネライは、天台・伝教等の法華教学を継承された日蓮聖人に、果して独自の女人成仏観が見られるものかどうかを探るところにある。日蓮聖人遺文全体には十界互具論・龍女成仏・變成男子・回転成仏・即身成仏・

二乗作仏・久遠実成・一念三千の成仏・唱題成仏・開会等の成仏問題が横溢している。これらは、また相互に関連し合っている問題であるから、これらを手掛かりにし、日蓮聖人の女人成仏観を研究するものである。

## 二 法華経と諸経との成仏相違

日蓮聖人の宗教的発心の動機は自身の成仏を願うことから出発したのであるが、同時に父母を救うことも目的であったことは『開目抄』の次の文から窺える。

仏弟子は必<sup>ス</sup>四恩<sup>ヲ</sup>をしつて知恩報恩<sup>ハ</sup>ほうずべし。……父母の家を出て出家の身となるは必<sup>ス</sup>父母<sup>ヲ</sup>をすくはんがためなり。(定五四四頁)

四恩を強調されているのは41歳の『四恩鈔』(定三三七―九頁)に見えるが、左の文の(一)(二)の如く四恩の中、父母、特に母への報恩の達成を以て成仏問題を論ずることは、日蓮聖人の独自の女人成仏観ではあるまいか。

(一)三世の諸仏の世に出させ給<sup>ト</sup>ても、皆皆四恩を報ぜよと説き、三皇・五帝・孔子・老子・顔回等の古の賢人は四徳を修せよと也。四徳と者、一には父母に孝あるべし。……四の得を振舞ふ人は、外典三千巻をよまねども、読たる人となれり。

一 仏教の四恩者、一には父母の恩を報ぜよ、二には国主の恩を報ぜよ、三には一切衆生の恩を報ぜよ、四には三宝の恩を報ぜよ。……然間、四恩を報ずべきかと思ふに、女人をさらはれたる間、母の恩報じがたし。次に仏、阿含小乘経を説給<sup>ト</sup>し事十二年、是こそ小乗なれば我等が機にしたがふべきかと思へば、男は五戒、女は十戒、法師は二百五十戒、尼は五百戒を持て三千の威儀を具すべしと説たれば、末代の我等かなふべしとおぼえねば、

日蓮聖人の女人成仏観(桑名)

母の恩報じがたし。況此経にもさらはれたり。方等・般若四十余年の経経に皆女人をさらはれたり。但天女成仏経・觀経等にすこし女人の得道の経文有といへども、但名のみ有て実なき也。其上、未顕眞実の経なれば如何が有けん。四十余年の経経に皆女人を嫌れたり。何れか四恩を報ずる経有と尋れば、法華経こそ女人成仏する経なれば八歳の龍女成仏し、仏の姨母憍曇弥・耶輸陀羅比丘尼記別にあづかりぬ。されば我等が母は但女人の体にてこそ候へ、畜生にもあらず、蛇身にもあらず。八歳の龍女だにも仏になる。如何ぞ此経の力にて我母の仏にならざるべき。されば法華経を持つ人は父と母との恩を報ずる也。我心には報ずると思はねども、此経の力にて報ずる也。（『上野殿御消息』定一一二四―二七頁）

(二) 一代聖教の中には法華経第一、法華経の中には女人成仏第一なりとことわらせ給にや。されば日本一切の女人は法華経より外の一切経には女人成仏せずと嫌とも、法華経にだにも女人成仏ゆるされなばなにかくるしかるべき。……其恩徳ををもへば父母の恩・国王の恩・一切衆生の恩なり。父母の恩の中に慈父をば天に譬へ、悲母を大地に譬へたり。いづれもわけがたし。其中悲母の大恩ことにほうじがたし。此を報ぜんともうに外典の三墳・五典・孝経等によて報ぜんともへば、現在をやしないて後生をたすけがたし。身をやしない魂をたすけず。内典仏法に入て五千七千余卷、小乘大乘は、女人成仏かたければ悲母の恩報がたし。小乗は女人成仏一向に許れず。大乘経は或は成仏、或は往生を許たるやうなれども仏の仮言にて実事なし。但法華経計こそ女人成仏、悲母の恩を報ずる実の報恩経にては候へと見候しかば、悲母の恩を報ぜんために此経の題目を一切の女人に唱させんと願す。（『千日尼御前御返事』（定一五四―一四二頁））

(一) の御消息は建治元年、南条時光に与えた書である。日蓮聖人が身延入山されたのは前年の文永十一年五月十七日

であるが、直後の七月二十六日に時光は母の使いで供養の品々を身延に届け対面されている。時光は文永二年、幼少にて父を失い母の手により養育されていた。同十一年十一月十一日、日蓮聖人は時光が法華経信仰者になったことを聞き大変喜ばれている(定八三六頁)。日蓮聖人は時光の母を思う気持を知り、悲母の報恩の達成に揃めて女人成仏を説き、いかに法華経の功德が勝れているかを説かれたものである。

(二)の御消息は冒頭に「送給御文云、女人の罪障はいかがと存候へども、御法門に法華経は女人の成仏をさきとするぞと候しを、萬事はたのみまいらせ候て等云云」(定一五三八頁)とある様に、千日尼が自ら法華経の女人成仏を期待し、その方法を求めたことへの返書である。本書に「一代聖教の中には法華経第一、法華経の中には女人成仏第一なり」という表明が見られるのは活積した日蓮聖人の女人成仏観が窺える。千日尼は阿仏房の妻である。日蓮聖人が佐渡流罪中(一二七一―四年)の折、阿仏房夫妻は献身的な給仕をされた。本書は弘安元年七月六日阿仏房が身延の日蓮聖人に三度目の面会を果し(定一五四六頁)、その帰途七月二十八日にこの手紙を千日尼宛に託された。その内容には老夫婦が日蓮聖人佐渡に在りし時の庵室に昼夜、地頭・念仏者の目を避け、夜中に櫃を背負つて日蓮聖人を供養されたことに触れ感謝し、日蓮聖人から「いつの世にかわすからむ。只悲母の佐渡国に生かわりて有か」(定一五四五頁)と述べられている。その千日尼への返書だけに、長文(真蹟24紙完)にて女人成仏が説示されている。今、その大部分を省略するも、(一)と同様に悲母の報恩問題と女人成仏とを直結されて世間・出世間の教えを尋究して見た結果、法華経の題目を唱える以外に、女性の成仏できる方法はない答えられているのである。この唱題成仏については後述するところである。

(一)と(二)の御消息文には女人成仏に関して、もう一つの問題が孕んでいる。(二)の引用には龍女が即身に成仏した部分

を省略するが、(一)(二)とも法華經提婆品の龍女成仏を手本にし、女人成仏が説かれている。一般的な理解としては、提婆品龍女の成仏も變成男子の成仏と見られている訳であるから(一)の『天女成仏經』の転女成男（變成男子）との相違問題が起ころ。その相違は円体無殊論・爾前無得道論・十界互具論の視点から考察すると、より明らかとなろう。

『天女成仏經』（『転女身經』の別称）の主人公である無垢光女が、どのようにして転女成男、つまり變成男子をされたのか、その内容を見ると『転女身經』には、無垢光女が仏にどのような善行を行なえば、女身を離れて速やかに男子と成り無上菩提の心を發せるかと問ひ、仏は無垢光女に対して十の方法を以て答えている。その一例を挙げる<sup>3</sup>と復次女人成就二法。能離女身得成男子。何謂為二。所謂除其慢心。離於欺誑。不作幻惑。所有善根。遠離女身速成男子。悉以廻向無上菩提。是名為二。

確かに變成男子の成仏が見えるのである。また『觀經』（觀無量壽經の略称）にも變成男子の往生・成仏の義があることは日蓮聖人も承知をし屢々論ずるところである<sup>4</sup>。然し、これも方便と見られたのである。他に、女人成仏に関する經典が見えるのは、胎經（菩薩處胎經第四卷隨喜品）積女の成仏（定七一頁）。雙觀經（大無量壽經）四十八願の中の三十五願の變成男子の内容（定七一・三四九〜五〇頁）。海龍王經の龍女作仏（定三三五〜六頁）。転女成仏經（定二六三頁）等がある。この他、春日禮智・平川彰・田賀龍彦・藤田宏達氏等の研究業績により諸經典における變成男子等の女人成仏を知ることができる<sup>5</sup>。日蓮聖人は、一々それらの經典を取り挙げてはいない。然し、後述する理由から、爾前經は有名無実と批判された範疇に含まれるものと理解してよい訳である。

さて法華經と諸經に説く成仏問題の相違については、立教開宗後の最初の著作である37歳『二代聖教大意』に、法華經に説く成仏と諸經に説く成仏との相違問題を次のように説示されている。

問云諸經にも悪人成レ仏。華嚴經調達之授記 普超經闍王授記 大集經婆藪天子之授記 又女人成レ仏。胎經釈女之成仏。畜生成レ仏。阿含經 鴿雀之授記。二乗成レ仏。方等だらに經。首楞嚴經等也。菩薩成仏華嚴經等。具縛凡夫往生觀經之下品下生等。女人転ニ女身ニ雙觀經之四十八願之中三十五願。此等法華經之二乗・龍女・提婆・菩薩授記何カわりめあるか。又設カわりめありとも諸經にても成仏うたがひなし如何。答予之習伝處法門此答頭べし。此答法華經諸經超過。又諸經成仏許不レ許可レ聞。秘藏之故頭露に不レ書。(定七〇―一頁)

この相違について38歳『爾前得道有無御書』では爾前を当分得道、法華經は跨節得道という(定一四八頁)。また36歳書写の図録『三八教』に当分を相待妙(華嚴円、方等円、般若円、法華円の二妙の中の相待妙)、跨節は法華円の二妙の中の絶待妙という(定二二五―八頁)。そして39歳の『唱法華題目鈔』には次の様に言うのである。

天台大師、四教を立給に四の筋あり……四には爾前の円をば法華に同ずれども、但法華經の二妙の中の相待妙に同じて絶待妙には不レ同。此四の道理を相對して六十卷をかんがうれば狐疑の氷解たり。(定二〇〇―二頁)

先の『一代聖教大意』における諸經の成仏と法華經の成仏相違問題であるが、日蓮聖人は諸經の成仏(爾前円)は、法華円の相待妙と共通の部分があるけれども、法華円の絶待妙(悪即善・煩惱即菩提・生死即涅槃)とは大きな相違を説いたのである。諸經の円頓速疾の法門とする胎經等の女人成仏は、法華円の相對妙の小善即大善とする考えと同じである。小善が成仏(大善)となるのは、善体(内容)が一つだからで、小さな善でも行くと大善になるといふ。小善成仏の相待妙だけが共通するからと言って、法華円と爾前円は変わらない。同じであると言えは円体無殊論に陥る。日蓮聖人は日本の謗法は、この円体無殊の考えが盛んになったから起きたと喝破された。この円体無殊論の悪義を糾すため爾前無得道論を展開するのである。

爾前無得道批判の理論的根柢は十界互具論である。成仏問題で十界互具の重要性は次の文からも明らかである。

自<sub>リ</sub>法華經<sub>ニ</sub>外<sub>ニ</sub>四十余年<sub>ノ</sub>諸經<sub>ニ</sub>無<sub>ク</sub>十界互具<sub>ニ</sub>。不<sub>レ</sub>說<sub>ク</sub>十界互具<sub>ニ</sub>不<sub>レ</sub>知<sub>ル</sub>内心<sub>ノ</sub>仏界<sub>ヲ</sub>。不<sub>レ</sub>知<sub>ル</sub>内心<sub>ノ</sub>仏界<sub>ニ</sub>不<sub>レ</sub>顯<sub>ル</sub>外<sub>ニ</sub>諸佛<sub>ニ</sub>。故<sub>ニ</sub>四十余年<sub>ノ</sub>權行者<sub>ノ</sub>不<sub>レ</sub>見<sub>ル</sub>佛<sub>ヲ</sub>。設<sub>ヒ</sub>雖<sub>モ</sub>見<sub>ル</sub>佛<sub>ヲ</sub>見<sub>ル</sub>他<sub>ノ</sub>佛<sub>也</sub>。二乘<sub>ノ</sub>不<sub>レ</sub>見<sub>ル</sub>自<sub>レ</sub>佛<sub>ヲ</sub>故<sub>ニ</sub>無<sub>ク</sub>成<sub>ル</sub>佛<sub>也</sub>。爾前<sub>ノ</sub>菩薩<sub>亦</sub>不<sub>レ</sub>見<sub>ル</sub>自<sub>レ</sub>身<sub>ノ</sub>十界互具<sub>ニ</sub>。不<sub>レ</sub>見<sub>ル</sub>二乘<sub>ノ</sub>成<sub>ル</sub>佛<sub>也</sub>。故<sub>ニ</sub>衆生<sub>無</sub>邊<sub>ノ</sub>誓願<sub>度</sub>願<sub>不</sub>滿<sub>足</sub>。故<sub>ニ</sub>菩薩<sub>不</sub>見<sub>ル</sub>佛<sub>ヲ</sub>。凡<sub>夫</sub>亦<sub>不</sub>知<sub>ル</sub>十界互具<sub>ヲ</sub>故<sub>ニ</sub>不<sub>レ</sub>顯<sub>ル</sub>自<sub>レ</sub>身<sub>ノ</sub>佛<sub>界</sub>。〔守護國家論〕定一二四頁）

初期の日蓮聖人遺文には、この十界互具論の立場から爾前無得道をいう。十界互具とは、余界の功德も一界の功德に具足されるという理論から衆生成仏が可能となる。逆に二乗作仏を否定すると、次の如く余界成仏の否定となる。

問云<sub>ク</sub>二乘<sub>ノ</sub>成<sub>ル</sub>佛<sub>無</sub>レ之<sub>者</sub>菩薩<sub>ノ</sub>成<sub>ル</sub>佛<sub>無</sub>レ之<sub>正</sub>證<sub>文</sub>如何<sub>也</sub>。答云<sub>ク</sub>涅槃經<sub>三</sub>十六<sub>ニ</sub>云<sub>ク</sub>雖<sub>レ</sub>信<sub>ト</sub>佛<sub>性</sub>是<sub>レ</sub>衆生<sub>有</sub>不<sub>レ</sub>必<sub>ス</sub>一切<sub>皆</sub>悉<sub>有</sub>之<sub>也</sub>。是<sub>レ</sub>故名<sub>爲</sub>信<sub>不</sub>具<sub>足</sub>。如<sub>シ</sub>此文<sub>者</sub>先<sub>四</sub>味<sub>之</sub>諸<sub>菩薩</sub>皆<sub>一</sub>闡<sub>提</sub>人<sub>也</sub>。不<sub>レ</sub>許<sub>二</sub>乘<sub>作</sub>佛<sub>也</sub>。非<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>成<sub>二</sub>乘<sub>作</sub>佛<sub>也</sub>。將<sub>又</sub>菩薩<sub>作</sub>佛<sub>不</sub>許<sub>レ</sub>之<sub>者</sub>也。以<sub>レ</sub>之<sub>思</sub>之<sub>四十</sub>余年<sub>之</sub>文<sub>不</sub>許<sub>二</sub>乘<sub>作</sub>佛<sub>也</sub>。菩薩<sub>之</sub>成<sub>佛</sub>又<sub>無</sub>レ之<sub>者</sub>也。（定一四五—一六頁）

また天台大師は「法華文句」に、法華經の優位性を次のように表明されている。

他<sub>經</sub>但<sub>記</sub>菩薩<sub>不</sub>レ記<sub>二</sub>乘<sub>也</sub>。但<sub>記</sub>善<sub>不</sub>レ記<sub>レ</sub>惡<sub>也</sub>。但<sub>記</sub>男<sub>不</sub>レ記<sub>レ</sub>女<sub>也</sub>。但<sub>記</sub>人<sub>天</sub>不<sub>レ</sub>記<sub>レ</sub>畜<sub>也</sub>。今<sub>經</sub>皆<sub>記</sub>也。

これは十界互具論の衆生皆成仏道の視点から菩薩よりも二乗。善人よりも悪人。男性よりも女性。人間及び神々よりも畜生の成仏を重く捉えたのである。換言すれば、法華經の特色を最も劣る機根の衆生救済の教えであると見たのである。この文を日蓮聖人は屢々引用する。また次の表明を見れば、日蓮聖人もまた劣機救済の思想を繼承されたと知れる。「諸經は悪人・愚人・愚者・鈍者・女人・根缺等の者を救ふ秘術をば未<sub>レ</sub>說<sub>レ</sub>顯<sub>ニ</sub>おほしめせ。法華經の一切經

に勝候故は但此事に侍り」(定一九七頁) また日蓮聖人に法華文句卷第七「他経は但、菩薩に記して二乘に記せず等云云」の文をもつて龍女成仏の经文証拠とする考えが見られる(定四一二頁)。

### 三 龍女成仏と即身成仏

法華経の劣機救済思想の立場から考えると提婆品の龍女成仏は、その良き現証であると言える。法華経に見られる女人成仏について日蓮聖人は龍女以外にも摩訶波闍波提比丘尼を九回、耶輸陀羅女を七回、十羅刹女を二回取り上げている。他に摩耶・青提女等の成仏も指摘するが龍女成仏の記述は、管見するところ三十九回程あり実に多い。その理由は摩訶波闍波提と耶輸陀羅女は未来成仏であり、龍女成仏は法華経の特色である即身成仏と認識し女性信者等の教化として尊重されたものであろうかと思われるのである。

先述の『法華文句』(大正三三卷)に天台大師は龍女成仏を即身成仏と述べていないから、この文を以て天台に龍女の即身成仏ありとする日蓮聖人の用例は、正に活釈と言ってよい。また『日蓮聖人遺文』には、龍女成仏を以て即身成仏とする記述内容が十四箇所程見られる。二、三その代表例を挙ぐると、次の通りである。

①龍女が成仏此一人にはあらず、一切の女人の成仏をあらはす。法華已前の諸小乗経には女人成仏をゆるさず。諸大乘経には成仏往生をゆるすやうなれども、或改転の成仏一念三千の成仏にあらざれば、有名無実の成仏往生なり。挙一例証と申て龍女成仏は末代の女人の成仏往生の道をふみあけたるなるべし。……今法華経の時こそ、女人成仏の時悲母の成仏顕れ、達多悪人成仏の時父成仏顕るれ。此の経は内典の孝経也。(『開目抄』定五八九)

九〇頁)

②第五卷に即身成仏と申一經第一の肝心あり。譬へばくろき物を白くなす事漆を雪となし、不浄を清浄になす事、濁水に如意珠を入たるがごとし。龍女と申せし小蛇を現身に仏になしてましくき。此時こそ一切の男子の仏になる事をば疑者は候はざりしか。されば此經は女人成仏を手本としてとかれたりと申。されば日本国に法華經の正義を弘通し始まらせし、叡山根本伝教大師の此事釈給には、能化所化俱無歴劫妙法経力即身成仏等。漢土の天台智者大師法華經の正義をよみはじめ給しには、他經但記男不記女乃至今經皆記等云云。此は一代聖教の中には法華經第一、法華經の中には女人成仏第一なりとことわらせ給にや。されば日本一切の女人は法華經より外の一切經には女人成仏せずと嫌とも、法華經にだにも女人成仏ゆるされなばなにかくるしかるべき。（『千日尼御前御返事』定一五四―一五二頁）

③夫第五卷は一經第一の肝心なり。龍女が即身成仏あきらかなり。提婆はこゝろの成仏をあらはし、龍女は身の成仏をあらはす。一代に分絶たる法門也。さてこそ伝教大師は法華經の一切經に超過して勝れたる事を十あつめ給たる中に、即身成仏化導勝とは此事也。此法門は天台宗の最要にして即身成仏義と申て文句の義科也。（『上野殿御返事』定一六三四頁）

②③の引用文から見ても判るように、伝教大師「法華秀句」「能化龍女無歴劫行」「所化衆生無歴劫行」「能化所化俱無歴劫妙法経力即身成仏」の文を引いて、龍女の即身成仏を論ずることが多い。浅井円道博士の指摘によると、伝教大師以前に妙楽大師が「法華文句記」提婆品釈で龍女成仏を即身成仏とする使用例が一回あるという<sup>13)</sup>とすれば最初に妙楽大師が法華經の龍女成仏は即身成仏であるという思想の名付け親になる。がしかし、始めて即身成仏の法門を形成した人は伝教大師であるとの指摘が見られる<sup>14)</sup>。日蓮聖人が龍女成仏の即身成仏を重視した背景には、即身成

仏の法門を形成された法華經の一大特色として数え上げるに至った伝教大師の影響が実に大きかったと言えるのである。

但し、日蓮聖人の「四信五品鈔」に説示されるように、日蓮聖人と伝教大師の法華經修行者の階位の認識は同じではない（定一二九五頁）。結論から先きに言えば日蓮聖人は名字即成仏の立場にあり、伝教大師は初住成仏を提唱されたから、両者の間には成仏規定について異なりが見られる。その視点に立つて、龍女成仏を法華經の特色とする伝教大師と日蓮聖人との間に即身成仏そのものの内容に、どのような相違が見られるのか関心のあるところである。

伝教大師の『法華秀句』「即身六根互用勝七」と「即身成仏化導勝八」における即身成仏の法門の部分を見ると、「即身六根互用勝七」の文は、

謹案<sup>テスルニ</sup>法華法師功德品云。若善男子。善女人。受持<sup>シ</sup>是法華經。若誦<sup>シ</sup>若誦。若解說。若書寫。是人當得<sup>ニ</sup>八百眼功德。千二百耳功德。八百鼻功德。千二百舌功德。八百身功德。千二百意功德。以<sup>テ</sup>是功德莊嚴<sup>シ</sup>六根。皆令<sup>ム</sup>清淨<sup>ナラ</sup>已上。當<sup>レ</sup>知。受持<sup>シ</sup>法師。誦<sup>シ</sup>法師。誦<sup>シ</sup>法師。誦<sup>シ</sup>法師。書寫<sup>シ</sup>法師。此<sup>レ</sup>五種法師。各依<sup>リ</sup>法華經。各獲<sup>ル</sup>千功德。其<sup>ハ</sup>即位中<sup>ニ</sup>。第四相似即位也。（中略）父母所生清淨肉眼（中略）明知。父母所生。即身異名<sup>ナルコトヲ</sup>。

「即身成仏化導勝八」の文は、

謹案<sup>テスルニ</sup>法華經提婆達多品云。文殊師利言。我於<sup>ニ</sup>海中<sup>ニ</sup>唯宣<sup>シ</sup>妙法蓮華經<sup>ニ</sup>已上。當<sup>レ</sup>知。是文不<sup>レ</sup>能成仏經<sup>ニ</sup>。以<sup>テ</sup>爲<sup>ス</sup>往復端<sup>ト</sup>也。（中略）當<sup>レ</sup>知龍女開<sup>キテ</sup>身密<sup>ヲ</sup>。示<sup>シ</sup>速成仏事<sup>ヲ</sup>。顯<sup>ス</sup>法華經勢<sup>ヲ</sup>。化<sup>シ</sup>十方衆生<sup>ヲ</sup>。有人會<sup>シ</sup>云。是<sup>ハ</sup>此權化<sup>ナリ</sup>。実凡不<sup>レ</sup>成。難<sup>シ</sup>云。權是引<sup>キテ</sup>実。実凡不<sup>レ</sup>成仏<sup>ト</sup>。權化無用<sup>ナラン</sup>。經力今<sup>レ</sup>没<sup>セ</sup>。（中略）有人云。變成男子者。未<sup>レ</sup>免<sup>レ</sup>取捨<sup>ヲ</sup>。今謂<sup>フ</sup>。法性取捨。法性緣起。常差別<sup>ナルカガリ</sup>故。法性同体。法性平等。常平等<sup>ナルカガリ</sup>故。常平等<sup>ナルカガリ</sup>故。不<sup>レ</sup>出<sup>ス</sup>。

日蓮聖人の女人成仏觀（桑名）

法界<sup>フツカイ</sup>。常差別故<sup>トシテ</sup>。不礙<sup>ハ</sup>取捨<sup>ヲ</sup>。〔中略〕釈迦<sup>ハ</sup>。以<sup>テ</sup>由<sup>ル</sup>智積文殊弘<sup>ハ</sup>妙法<sup>ヲ</sup>龍女顯<sup>ハ</sup>經力<sup>ヲ</sup>。如<sup>キ</sup>是<sup>ノ</sup>妙論議<sup>ハ</sup>。己顯真<sup>ニ</sup>実<sup>ノ</sup>。宣示顯說也<sup>ト</sup>。〔中略〕能化龍女。無<sup>ク</sup>歷劫<sup>ノ</sup>行<sup>ニ</sup>。所化衆生。無<sup>ク</sup>歷劫<sup>ノ</sup>行<sup>ニ</sup>。能化所化俱無<sup>ク</sup>歷劫<sup>ノ</sup>。妙法<sup>ヲ</sup>經力<sup>ヲ</sup>。即身成仏。上根利根。一生成仏。中根利根。二生成仏。下根利根三生成仏。〔中略〕他宗所依<sup>ル</sup>經<sup>ニ</sup>都無<sup>ク</sup>即身入<sup>ル</sup>。雖<sup>シ</sup>二分即入<sup>ル</sup>推<sup>テ</sup>八地已上<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>許<sup>ス</sup>凡夫身<sup>ヲ</sup>。天台法華宗。具有<sup>リ</sup>即入<sup>ル</sup>義<sup>ニ</sup>。四衆八部一切衆生。円機凡夫。發心修行。即入<sup>ル</sup>正位<sup>ニ</sup>。得<sup>レ</sup>見<sup>ル</sup>普賢<sup>ヲ</sup>。不<sup>レ</sup>推<sup>テ</sup>八地<sup>ニ</sup>。許<sup>ス</sup>凡夫<sup>ヲ</sup>故<sup>ニ</sup>。〔中略〕一切衆會。皆悉得<sup>レ</sup>見<sup>ル</sup>是<sup>ノ</sup>故<sup>ニ</sup>。默然信受<sup>ス</sup>。他宗所依<sup>ル</sup>經<sup>ニ</sup>無<sup>ク</sup>如<sup>キ</sup>是<sup>ノ</sup>信受<sup>ス</sup>。有<sup>リ</sup>如<sup>キ</sup>是<sup>ノ</sup>信受<sup>ス</sup>。即身成仏。化導之義。寧<sup>ロ</sup>不<sup>レ</sup>勝<sup>ル</sup>於他宗<sup>ニ</sup>哉。

伝教大師の「法華秀句」の「即身六根互用勝第七」と「即身成仏化導勝第八」において、初めて即身成仏の法門は形成されたのである。そして伝教大師によつて即身成仏の法門は法華經の一大特色として数え上げられることに至つたのである。

「即身六根互用勝七」は、その名前の如く法師功德品・五種法師の修行者の功德が説かれている。具体的には六根清淨の相似即の位が得られるを説く。この相似即は凡夫の最高位の位であり、生死問題でいえば分段生死に当る。また円教の行位でいえば、断迷開悟という修道者をいうのである。

「即身成仏化導勝八」は明確に、凡夫人という語を使って提婆品の龍女成仏の勝れた徳を顕わしている。即身成仏とは生死問題でいふと変易生死を指し、また仏道修行でいふと、増道損生をしていく証道をいうのである。但し天台法華教学では、この成仏をいう場合は五十二位の中の初住成仏と次の様に規定しているのが伝統なのである。

(イ)『法華女義』第五下<sup>(1)</sup>に

円信円行<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>由<sup>ル</sup>歴別<sup>ヲ</sup>。於<sup>テ</sup>一生中<sup>ニ</sup>即入<sup>ル</sup>初住<sup>ニ</sup>。得<sup>レ</sup>見<sup>ル</sup>仏性<sup>ヲ</sup>。如<sup>ク</sup>牛食<sup>ル</sup>忍草<sup>ヲ</sup>。不<sup>レ</sup>歴<sup>ス</sup>四味<sup>ヲ</sup>卓出<sup>ス</sup>醍醐<sup>ヲ</sup>。故<sup>ニ</sup>

知円教意也。忍草譬<sup>ス</sup>境妙<sup>ニ</sup>。牛譬<sup>ス</sup>智妙<sup>ニ</sup>。食<sup>スル</sup>者譬<sup>ス</sup>行妙<sup>ニ</sup>。出<sup>ス</sup>醍醐<sup>ニ</sup>譬<sup>ス</sup>位妙<sup>ニ</sup>。此円意也。牛食<sup>スル</sup>餘草<sup>ニ</sup>血乳<sup>ニ</sup>轉<sup>ス</sup>。歷<sup>ス</sup>四味<sup>ニ</sup>已方成<sup>ス</sup>醍醐<sup>ニ</sup>。餘<sup>ニ</sup>方便教境智行位皆<sup>ハ</sup>危意也。

(ロ)『摩訶止観』卷第六下<sup>に</sup><sup>18)</sup>

始自<sup>メ</sup>初品<sup>ニ</sup>終至<sup>リ</sup>初住<sup>ニ</sup>。一生<sup>ニ</sup>可<sup>レ</sup>修<sup>ス</sup>一生<sup>ニ</sup>可<sup>レ</sup>證<sup>ス</sup>。

(ハ)『摩訶止観』第一下<sup>に</sup><sup>19)</sup>

分真即<sup>ト</sup>者。因<sup>テ</sup>相似<sup>ノ</sup>觀力<sup>ニ</sup>入<sup>ル</sup>銅輪位<sup>ニ</sup>。初<sup>メ</sup>被<sup>シ</sup>無明<sup>ヲ</sup>見<sup>ル</sup>仏性<sup>ヲ</sup>。開<sup>テ</sup>寶藏<sup>ヲ</sup>顯<sup>ス</sup>眞如<sup>ヲ</sup>。名<sup>ヲ</sup>發心住<sup>ト</sup>。

天台の『法華玄義』第五下に、「一生の中に於て、即ち初住に入り」といい。『摩訶止観』卷第六下にては「始め初品より終り初住に至るまで、一生に修す可く一生に證す可し」と規定されているのである。また初住（發心住）が分真即であることは『摩訶止観』第一下に説示されている通りである。従つて妙樂・伝教大師の成仏觀も、天台法華教學の伝統規定に基づき初住成仏を主張されたことは勿論言うまでもないことである。

さて、龍女の即身成仏の問題であるが、天台教學は初住成仏を分真即の位に置いているから変易生死である。肉体をもつのは凡位（理即・名字即・觀行即・相似即）である。分真即の位は肉体をもたないので、果して即身成仏といえるのか、どうかという問題を、クリアする為に伝教大師は三生成仏を打ちだした。歴劫成仏に比較すれば三生成仏も即身成仏の中に入ると捉えたのである。これは天台教學の初住成仏という限界があるためである。また上根の一生における即身成仏の解決問題に法華秀句で法性縁起を以つて、法身の理（法性）の成仏なるが故に、法界では肉体を持つているとか、捨てなければならないという問題を考える必要はないと提唱する<sup>20)</sup>のも伝統規定があるためである。

これに対して、日蓮聖人の即身成仏觀は建治三年56歳『四信五品鈔』において

日蓮聖人の女人成仏觀（桑名）

日蓮聖人の女人成仏觀（桑名）

分別功德品四信与五品一 修行法華之太要 在世滅後之龜鏡也。……其中現在四信之初、一念信解与滅後五品第一初隨喜一 此二處、一同百界千如一念三千寶篋 十方三世諸仏出門也。天台妙樂、二聖賢定、此二處位、有三三、積一。所謂或相似十信鉄輪位。或觀行五品初品位 未斷見思。或名字即位也。止觀会其不定云、仏意難知、起レ機異說。借レ此開解、何勞苦諍云。予意云三積之中名字即者叶レ經文之歟。……就レ中 壽量品失心・不失心等皆名字即位也。（定一一九五頁）

と説き、末法の法華經修行者の位階を円教の修道者（十信）以前の外凡の位である五品弟子位、しかもその中の特に初隨喜品を日蓮聖人独自の法華經觀をもつて名字即位と規定されたのである。そして在世の四信の中の初信である一念信解と、いま名字即位と規定された初隨喜品位の中には百界千如と一念三千という宝の山が秘藏されており、三世諸仏を生みだす源であるという認識を表明されたのである。また『同鈔』では、次の文に説き示めされるように題目を唱える修行者が初隨喜品の位であり、名字即の位であると規定する。唱題の当処に名字即成仏があるとし、即身成仏を主張されたのである。この唱題成仏は日蓮聖人の法門の特色であり、天台・伝教の成仏觀とは大きく異なる。

問入末法初心行者必具円三学不答云……所謂五品之初三品一仏正制止戒定一法一向限慧一分慧又不堪以信代慧。信一字為詮。不信一闡提謗法因信慧因名字即位也。（定一一九六頁）

問云末代初心行者制止何物乎。答曰制止檀戒等五度一向令称南無妙法蓮華經為一念信解初隨喜之氣分也。是則此經本意也。（定一一九六頁）

#### 四 末法は下種成仏

日蓮聖人の独自の法華經觀とは、仏滅後の末法に法華經が弘通されるという観点から、法華經の特色を独自に捉えられた法華經觀である。それは「觀心本尊抄」「法華取要抄」「新尼御前御返事」等に見られる。此にその文を挙げると次の通りである。

A『觀心本尊抄』(眞蹟現存)は本法三段の教判。

又於本門有正序正流通。自過去大通仏法華經乃至現在華嚴經乃至迹門十四品・涅槃經等一代五十余年諸經十方三世諸仏微塵經々皆壽量序分也。自一品二半之外名小乘教・邪教・未得道教・覆相教。(定七一四頁)

壽量品中心の独自の教判であるが、一品二半の正宗分は、左の文の説示によると題目の五字を明かしていることは一目瞭然である。

以本門論之一向以末法之初為正機。所謂一往見之時以久種為下種。大通・前四味・迹門為熟至本門令登等妙。再往見之不似迹門。本門序正流俱以末法之始為詮。在世本門末法之初一同純円也。但彼脱此種也。彼一品二半此但題目五字也。(定七一五頁)

また流通分に説明が無いものの、右の文と『法華取要抄』の三五の二法、『新尼御前御返事』の起顕竟の法門を見ると、法華經一經の精神は本門の本尊である久遠実成釈尊の大慈大悲により、末法衆生(女人も勿論のこと)の救済成仏のために題目の五字の下種を弘通する地涌の菩薩達の活躍に他ならない。『曾谷入道殿許御書』にも「以題目之五字可為下種之由来不知歟」(定八七九頁)と述べるが如く下種成仏の展開が表明されているのである。

B『法華取要抄』(眞蹟現存)の三五の二法の文は、

今法華經与相對諸經超過一代廿種有之。其中最要有二。所謂三五二法也。三者三千塵点劫。諸經或

日蓮聖人の女人成仏觀（桑名）

明<sup>スコト</sup>ニ積尊<sup>イ</sup>因位<sup>ニ</sup>或<sup>ハ</sup>三祇<sup>ハ</sup>或<sup>ハ</sup>動<sup>ハ</sup>塵劫<sup>ハ</sup>或<sup>ハ</sup>無量劫<sup>ハ</sup>也。梵王<sup>云</sup>此土<sup>ニ</sup>自<sup>リ</sup>廿九劫<sup>ニ</sup>已來知行<sup>ノ</sup>主<sup>ナリ</sup>。第六天帝<sup>ニ</sup>積四天王等<sup>モ</sup>以<sup>テ</sup>如<sup>シ</sup>是<sup>レ</sup>。積尊<sup>ト</sup>梵王<sup>等</sup>始<sup>テ</sup>知行<sup>先</sup>後<sup>諍</sup>論<sup>ス</sup>之<sup>ヲ</sup>。雖<sup>レ</sup>爾<sup>拳</sup>一指<sup>降</sup>之<sup>ヲ</sup>。已來<sup>ニ</sup>梵天<sup>傾</sup>頭<sup>魔</sup>王<sup>合</sup>掌<sup>三</sup>界<sup>衆</sup>生<sup>令</sup>歸<sup>伏</sup>。積尊<sup>ニ</sup>是也。又諸<sup>ニ</sup>仏<sup>因</sup>位<sup>与</sup>積尊<sup>因</sup>位<sup>糾</sup>明<sup>之</sup>。諸<sup>ニ</sup>仏<sup>因</sup>位<sup>或</sup>三祇<sup>或</sup>五劫<sup>等</sup>。積尊<sup>ニ</sup>因位<sup>既</sup>三千塵劫<sup>ニ</sup>已來娑婆世界<sup>一切</sup>衆生<sup>結</sup>緣<sup>大</sup>士<sup>也</sup>也。此世界<sup>六道</sup>一切衆生<sup>他</sup>土<sup>他</sup>菩薩<sup>有</sup>緣<sup>者</sup>一人<sup>無</sup>之<sup>也</sup>。法華經<sup>云</sup>爾時<sup>聞</sup>法者<sup>各</sup>在<sup>諸</sup>仏所<sup>等</sup>云云（定八一—二頁）。教主<sup>積</sup>尊<sup>既</sup>五百塵劫<sup>ニ</sup>已來<sup>妙</sup>覺果滿<sup>仏</sup>也。大日如來・阿彌陀如來・藥師如來等<sup>尽</sup>十方<sup>諸</sup>仏<sup>我</sup>等<sup>本</sup>師<sup>教</sup>主<sup>積</sup>尊<sup>所</sup>從<sup>等</sup>也。天月<sup>万</sup>水<sup>浮</sup>是也。華嚴經<sup>十</sup>方<sup>台</sup>上<sup>毗</sup>盧遮那<sup>大</sup>日<sup>經</sup>・金剛頂經<sup>兩</sup>界<sup>大</sup>日如來<sup>宝</sup>塔<sup>品</sup>多<sup>宝</sup>如來<sup>左</sup>右<sup>脇</sup>土<sup>也</sup>。例<sup>如</sup>世<sup>王</sup>兩<sup>臣</sup>。此多<sup>宝</sup>仏<sup>壽</sup>量<sup>品</sup>教<sup>主</sup>積<sup>尊</sup>所<sup>從</sup>也。此土<sup>我</sup>等<sup>衆</sup>生<sup>五</sup>百<sup>塵</sup>劫<sup>已</sup>來<sup>教</sup>主<sup>積</sup>尊<sup>愛</sup>子<sup>也</sup>也。依<sup>テ</sup>不<sup>孝</sup>失<sup>子</sup>于<sup>今</sup>雖<sup>レ</sup>不<sup>覺</sup>知<sup>不</sup>可<sup>似</sup>他<sup>方</sup>衆<sup>生</sup>。有<sup>緣</sup>仏<sup>与</sup>結<sup>緣</sup>衆<sup>生</sup>譬<sup>如</sup>天<sup>月</sup>浮<sup>清</sup>水<sup>無</sup>縁<sup>仏</sup>与<sup>衆</sup>生<sup>譬</sup>如<sup>雷</sup>聲<sup>雷</sup>言<sup>者</sup>向<sup>日</sup>月<sup>也</sup>（定八一—二頁）

自<sup>安</sup>樂<sup>行</sup>勸<sup>持</sup>・提<sup>婆</sup>・宝<sup>塔</sup>・法<sup>師</sup>逆<sup>次</sup>讀<sup>之</sup>以<sup>テ</sup>滅<sup>後</sup>衆<sup>生</sup>爲<sup>レ</sup>本<sup>也</sup>。在<sup>世</sup>衆<sup>生</sup>傍<sup>也</sup>。以<sup>テ</sup>滅<sup>後</sup>論<sup>之</sup>正<sup>法</sup>一<sup>千</sup>年<sup>像</sup>法<sup>一</sup>千<sup>年</sup>傍<sup>也</sup>。以<sup>テ</sup>末<sup>法</sup>爲<sup>レ</sup>正<sup>也</sup>。末<sup>法</sup>中<sup>以</sup>日<sup>蓮</sup>爲<sup>レ</sup>正<sup>也</sup>。（定八一—三頁）

壽量品の教主積尊は五百塵劫より已來妙覺果滿の仏。諸仏を教主積尊の所從也とするは「開目抄」の「此過去常顯時 諸仏皆積尊の分身なり」（定五七六頁）と同文である。この考え方は天台・伝教にない日蓮聖人の独自の法華經觀である。「法華取要抄」は安樂より勸持・提婆・宝塔・法師と逆読法華をして、法華經のテーマが末法衆生の救済と捉え、その責任者は地涌の菩薩であるが、「末法の中には日蓮を以て正と為す」とは、正に法難体験を重ねたことにより到達された上行自覺の表明に他ならないのである。

Ｃ『新尼御前御返事』（真蹟曾存）の起顯竟の文は、

今此の御本尊は教主釈尊五百塵点劫より心中にをさめさせ給へ、世に出現せさせ給へても四十余年、其後又法華經の中にも迹門はせず、宝塔品より事をこりて寿量品に説き顯し、神力品囑累に事極て候しが、金色世界の文殊師利、兜史多天宮の弥勒菩薩、補陀落山の觀世音、日月淨明德仏の御弟子の藥王菩薩等の諸大士、我も我もと望み給しかども叶はず。是等は智慧いみじく、才学ある人人とはひびけども、いまだ日あさし、学も始たり、末代の大難忍びがたかるべし。我五百塵点劫より大地の底にかくしをきたる眞の弟子あり。此にゆづるべしとて、上行菩薩等を涌出品に召出させ給へ、法華經の本門の肝心たる妙法蓮華經の五字をゆづらせ給へ、あなかしこあなかしこ……末法の始に謗法の法師一閻浮提に充滿して、諸天いかりをなし、彗星は一天にわたらせ、大地は大波のごとくをどらむ。大旱魃・大火・大水・大風・大疫病・大飢饉・大兵乱等の無量の大災難並をこり、一閻浮提の人人各各甲冑をきて弓杖を手ににぎらむ時、諸仏・諸菩薩・諸大善神等の御力の及せ給ざらん時、諸人皆死して無間地獄に墮ること、雨のごとくしげからん時、此五字の大曼荼羅を身に帶し心に存せば、諸王は国を扶け、万民は難をのがれん。乃至後生の大火災を脱べしと仏記しをかせ給ぬ。(定八六六―八頁)

ABCの三書には、法華經本門の教主釈尊が末法の衆生を救済する大慈大悲の計画を法華經の中に説かれていることを日蓮聖人は知り強調されているのである。衆生は五逆・謗法・本末有善(定八九六頁)であるが故に難事業を宣言され(起、法師・宝塔)。弘通者を募り、更に地涌の菩薩を呼び出し、久遠実成釈尊の本体を打ち明けた(顕、涌出・寿量)。その中心責任者に本門の題目を付嘱し(竟、神力・囑累)、衆生にその題目を下種し成仏へと導く計画である。本門の題目の内容は既に「観心本尊抄」に

釈尊因行果徳、二法妙法蓮華經、五字具足。我等受持、此五字、自然讓与、彼因果功德。(定七一頁)

と表明されている。従つて南無妙法蓮華經を受持する衆生は、五百塵点劫已來の久遠実成釈尊の因行果徳の総てを自然に譲与されるので、唱題（妙法五字を受持）するその当処において成仏ができるのである。つまり前述の『四信五品鈔』の唱題の当処に名字即成仏となる意である。また鎌倉から佐渡流罪中の日蓮聖人のもとに片道の旅費しか工面つかない女性、乙御前の母が信仰上の問題があつて質問に來た。この女性は事情があつて離婚しており子の乙御前はまだ幼子である。その子の預け先きを必死に捜し当ててから來たことが消息文に窺える（定六四七頁）。当時鎌倉在中の信者は殆んど退轉する状況下であつた（定九七〇頁）から、日蓮聖人は感動の余り「日本第一の法華經の女人なり。故名を一つけたてまつりて不輕菩薩の義になぞらえん」（定六四七頁）と言つて「日妙聖人」と名前を付けられた。そしてこの女性に対して次のような教化をされているのである。

我等具縛の凡夫忽に教主釈尊と功德ひとし。彼の功德を全体うけとる故なり。（定六四五頁）

右の文には、まさに具体的な事例として名字即成仏の内容が説示されているのである。また前述の阿仏房の妻、千日尼に題目を唱えることにより女人も成仏ができると教示されていたが、この二人の女人成仏は勿論、變成男子ではない。その理由は名字即成仏という日蓮聖人の成仏観に基づき女性は女性のままに、久遠実成釈尊の因行果徳の妙法五字を受持すれば、法妙なるが故に人貴しとなり、唱題受持の当処に成仏ができるからである。この主張は、どのような衆生であつても可能なのである。換言すれば、日蓮聖人の成仏観は題目を離れての成仏はあり得ないのである。

また一念三千の仏種問題であるが、『観心本尊抄』に觀門の難信難解は木絵二像・草木成仏である（定七〇三頁）と述べ、再び一念三千の仏種に非ざれば有情の成仏・木絵二像の本尊は有名無実である（定七一一頁）という。末文には「不識一念三千者仏起大慈悲五字内裏此珠令懸末代幼稚頸云云」と一念三千と妙法五字の關係を論じている（定

七二〇頁)。更に日蓮聖人が屢々天台・妙樂・伝教大師の未だ弘通しない法門は、本門の本尊と四菩薩と戒壇と南無妙法蓮華經の五字である(「法華行者値難事」定七九八頁。同文は七四四、七四八、八一五、八一八、二二四八頁等)という表明を思い起こせば、一念三千の仏種なる概念の实体は本門の題目以外はあり得ないのであるまいか。

また一念三千を前述の『四信五品鈔』では、一念信解と初隨喜品位の二處は一念三千の宝篋、十方三世諸仏の出門(生みの親)であると解釈された。この初隨喜品の位は、名字即に当り、その気分は唱題の当処に成仏する名字即成仏を意味していた(定二二九五―六頁)。なお日蓮聖人独自の法華經觀を述べたABCの三書を概観したところ、法華經本門の教主釈尊は大慈大悲の精神をもって末法衆生を救済する事業計画を、法華經(起頭竟)の中に横溢し説かれており、その救済の妙薬は南無妙法蓮華經以外の何物でもなかったことを考え合わせれば、一念三千の仏種を南無妙法蓮華經と見てよい訳である。しかし一念三千には多義の意味がある。例えば『小乘大乘分別鈔』の文である。

二乗作仏・久遠実成は法華經の肝用にして諸經に對すれば奇たりと云へども、法華經の中にはいまだ奇妙ならず。一念三千と申す法門こそ、奇が中の奇、妙が中の妙にて……(定七七〇頁)

法華經の中の妙なる妙の真髓を一念三千と重視するのは『觀心本尊抄』の觀門の難信難解である。「十界久遠之上國土世間既顯。一念三千殆隔<sup>トテ</sup>竹膜<sup>ニ</sup>」(定七一四頁)という國土成仏を指す。法華經のテーマは、本門教主釈尊が末法衆生の救済を主眼に説き、その責任者は地涌の菩薩で、妙法五字の仏種を下種して救済することを中心に説かれているのである(定七六九頁)。と同時に地涌の菩薩は妙法五字を以て仏國土の顯現(立正安國)の責任が説かれているのである。一方、諸經・宝積經般若經・その他の転女成男思想の經典等には、ただその經の仏の因行と果徳しか説かれていない。法華經と諸經とを比較すると、法華經は何と素晴らしい經典なのかと思わざるを得ないのである。

五　む　す　び

日蓮聖人の独自の法華経観、女人成仏観は、佐前の天台・伝教を指南されていた32歳から佐渡へ流罪される前までの天台沙門時代の法難体験がなければ樹立できない。天台伝教大師への想いは筆舌できない程・常に讃仰されていたことは事実である（定二四三―五、五四〇―一、一〇二―六頁）。天台法華教学の伝統をもつて45歳根本大師門人の名前で書かれた『法華題目鈔』に「法華経の題目は八万聖教の肝心一切諸仏の眼目なり」（定三九二頁）と説いたけれども、その唱題の功德は四悪趣から離れるものでしかなかったのである。

その題目の功德が、本朝沙門として書かれた『観心本尊抄』には前述の通り、本門教主釈尊の因行果徳が余すところなく含まれている。この功德差の理由は、法難体験（慈悲）の深さから生まれたもので地涌の菩薩・上行菩薩としての教学の樹立にはかならないのである。前々からも法華経行者として法難体験の法悦はあった（定二四〇頁等）が、殊に「法華経のゆへに度々ながされずは数々の二字いかんがせん。此の二字は天台伝教いまだよみ給はず」（定五六〇頁）と表明するように佐渡流罪の法難体験を契機として独自の教学が発表されているのである。

日蓮聖人を頼った女性たちに、法華経は女人を第一とすると宣言されたのは、一切衆生皆成仏道を満足させる教えが法華経にしかないからであるが活釈された日蓮聖人の女人成仏観である。それと変成男子をしない女人成仏観も日蓮聖人の特色である。伝教大師が重視された提婆品の龍女成仏の用例が多いのは、現証面の功德を当時の人々に強調するためであろうか。しかし教学的には、提婆品は十界互具・二乗作仏の理論から方便品の枝葉として位置づけられていたのである（定二九〇、三三七頁）。

女人成仏に関して日蓮聖人のように、その成仏を徹底して究明された人は仏教史上いらないのではなからうか。四恩・父母・悲母の恩に報いるためから展開された女人成仏論も日蓮聖人の女人成仏観の特色である。それに、もう一つ忘れてはならない特色がある。それは日蓮聖人には親子同時成仏を強調されて、女人成仏を説く点である。例えば「末代、凡夫聞<sup>カハ</sup>此法門<sup>ヲ</sup>唯我一人非<sup>ミス</sup>成仏<sup>スルニ</sup>父母又<sup>モ</sup>即身成仏<sup>セツ</sup>此第一孝養也」(定一四五四頁・真蹟現存)と。具体的には「教主釈尊成道淨飯・摩耶得道。吉占師子・青提女・目憐尊者同時成仏也」(定一一五一頁・真蹟現存)という。多くの女性にとつて、正に日蓮聖人は救済者である。日蓮聖人は立正安国の運動、衆生の即身成仏と淨仏国土を展開された。これは、円行の証道の実践であり、仏の振る舞いの行動といつてよい。従つて女人を始め末代の成仏は立正安国に向かつて微力を尽す行動の当処に、唱題(身口意の三業受持)成仏の姿があると見ても過言ではあるまいと思つのである。

註

- (1) 文中の定〇〇頁は『昭和定本日蓮聖人遺文』全四巻の頁数の引用を示す。
- (2) 拙論「日蓮聖人の女性観」(『日本仏教学会年報』56号所収)九九―一〇〇頁。
- (3) 『大正新脩大藏經』(以下大正と略)第一四巻・転女身經九一八頁下、九一九頁上。
- (4) 觀無量壽經の得度は定一〇一、一一〇、三三八、五七五頁等。
- (5) 春日禮智「女人成仏と男女平等」(『印度学仏教学研究』15巻1号所収)一二五―三〇頁に60余経。平川彰「初期大乘仏教の研究」二六二―八二頁、般若経系8経。大宝積経・大集経等の19経。田賀龍彦「法華論における授記の研究」(坂本幸男編『法華経の中国的展開』所収・六六五―七九頁)阿含部を初め転女成男思想を授記作仏の関係から多くの経典を論ず。藤田宏達「転女成男の思想」(『三蔵』38・39所収)大宝積経11経、般若系。その淵源は原始仏教に溯るといふ。

日蓮聖人の女人成仏觀（桑名）

- (6) 小善成仏については『大正』第三十四卷二四九頁上・天台『法華文句』に「今経明ニ小善成仏ヲ。此取テ縁因ヲ為ス仏種ト。若不シ信ハセ小善成仏ト。則斷チ一切世間ノ仏種也。」という。日蓮聖人も小善成仏の重要性を定一〇五、二四六頁に引かれている。しかしこの小善成仏は、諸宗の重んじる爾前経（の円）と法華経の極理であるところの絶待妙の円と同じであるという円体無殊論の考え方に對しては、次のように日蓮聖人は強く批判されているのである。「天台一宗学者中不レ得レ此道理、爾前円と法華円と始終同義思故、見レ一處、円教経、一卷二卷等純円義存す故、於テ彼経等ニ成仏往生義理を許す人人是多クなり」（定一五三頁）、「日本国の謗法は爾前之円与テ法華円トという義の盛なりしよりこれははじまれり」（『十章鈔』定四九〇頁）と。また同文は『小乘大乘分別鈔』「水中の満月は実には体ありや。爾前の成仏・往生等は水中の星月の如し。爾前の成仏・往生等は体に随ふ影の如し。本門寿量品をもて見れば、寿量品の智慧をはなれては諸経は跨節・当分得道共に有名無実なり」（定七七三―四）と諸経の成仏を批判しているのである。
- (7) 定三二―三、七三、一一〇、一二四、一四五―七、一八三等。
- (8) 大正第三十四卷（妙法蓮華經文句卷第七上）九七頁上。
- (9) 定八四、一五一、三三四、三三八、三七五、四〇三、四二二、七四九、一五四一、一六二四、一八五五、二二五七頁等。
- (10) 摩訶波闍波提は定三三六、五四二、六四六、一一二七、一一四九、一二四九、一四二九、一八五五、一九〇三頁。耶輸陀羅女は定三三六、五四二、一一二七、一二四九、一二九三、一四二九、一七九九頁。十羅刹女は定三三六、七〇四頁。龍女成仏は定九、五〇、五二、七一、一四六、三三〇、三三一、三三二、三三五、三三六、三三七、四〇一―二、四〇四、四〇五、四一二、五八九、五九〇、六四六、六七三、六七三―四、六七四、七〇四、七九四、一〇〇三、一〇九六、一一二七、一五二八、一五四一、一六二四、一六三二、一六三四、一七七六、一七七七、二九三四頁。以下は龍女成仏を前提に、女性信者達への成仏教化が説示されている定八五八、九三三、一一一〇、一一四九、一五〇四、一五六九頁。
- (11) 龍女を即身成仏と記述する箇所は定九、三三〇、三三一、三三五、三三六、四〇四、六四六、六七三、六七四、七九四、一五二八、一五四一、一六三四、一七七七頁等。
- (12) 『伝教大師全集』第三卷二六五―六頁。『昭和定本日蓮聖人遺文』には、この文を引くこと九回程ある。定三三五、三八九、四〇四、一五二八、一五四一、一七七七、一七八一、一七九八、二二五一、三三七四頁。
- (13) 浅井円道『上古日本天台本門思想史』一八〇頁。

(14) 右同、一八四―八頁。

(15) 『伝教大師全集』第三卷二五八―九頁。

(16) 『伝教大師全集』第三卷二六〇―七頁。

(17) 『大正』第三十三卷(『妙法蓮華經玄義』第五下)七三九頁下―四〇頁上。

(18) 『大正』第四十六卷(『摩訶止観』第六下)八三頁上。

(19) 『大正』第四十六卷(右同)一〇頁下。

(20) 『伝教大師全集』第三卷二六四頁。日蓮聖人遺文の『妙一女御返事』に「教大師は分段の身を捨ても捨ずしても、法華經の心にては即身成仏也。覺大師の義は分段の身をすつれば即身成仏にあらずともはれたるが、あへて即身成仏の義をしらざる人々也」(定一七八〇頁)と述べられていることから、日蓮聖人も『法華秀句』の意見に従つたとする意見がある。

この『妙一女御返事』は、弘安三年七月十四日作で真蹟はない。同年十月五日作『妙一女御返事』に「去七月中旬之比、眞言法華即身成仏法門大体註進候し。其後は一定法華經の即身成仏を御用候らん」(定一七九六頁)とあり両書に関連する文がある。また本書に「今本門の即身成仏は……肉身を其ま本有無作の三身如来と云る是也」(定一七九八頁、真蹟なし)とある内容から考えると両書とも再考すべき余地がある遺文であろう。それは無作三身を述べる遺文には殆ど偽書が多いからである。